

## 特別養護老人ホームで看取った血液透析患者の一例

社会福祉法人照善会 こくら庵

医療法人衆和会 長崎腎病院

長崎宝在宅医療クリニック

○谷口和治 小森優也 山元紀子 桑内清美 小松利恵子 松尾誠治 船越 哲

### 【背景】

当施設は透析病院附設の特別養護老人ホームである。利用者全員が透析患者であり、スタッフも透析医療に精通しているため、患者・家族は終末期を病院での治療を望むケースがみられる。

### 【症例】

84歳女性、要介護3、透析歴8年、中等度の認知症あり。本人と家族、また家族間もやや疎遠な関係である。本人は施設での看取りを希望と推定された。家族は当初病院での看取りを希望していたが、医師の余命告知後に、施設で看取りたい長男と入院治療を行いたい長男妻の意向が対立していた。

### 【経過】

家族も交えたカンファレンスにより、施設での看取りの方針となった。経口摂取が不能となった後は、外部の緩和ケア専門医透析の併診とし、血液透析を継続しながら施設で看取った。

### 【考察】

患者は認知症を有していたが、施設スタッフ・主治医などのカンファレンスで家族間の意向調整を行った。加えて、最終的に緩和ケア専門医を導入した事が家族の安心感につながったと考える。